

# 興福寺旧境内の調査

## 一第464次

### 1 はじめに

奈良市登大路町に所在する奈良県合同庁舎のオイルタンク設置にともなう事前の発掘調査である。今回の調査区の東方約17mの地点では、合同庁舎の車庫増築にともなう発掘調査（第382次；平成16年度）がおこなわれている。合同庁舎建設時に大きく破壊されていたものの、12世紀末頃の土器を多量に含む整地土を確認し、この頃の火災ののちに整地したものと考えられた（『紀要 2005』84頁）。この状況は今回の調査区の西方約280mの地点でおこなった興福寺一乗院の発掘調査成果と符合するという（同前紀要）。このため、今回の調査区では同様の整地層の検出が期待された。

調査区の面積は、オイルタンク設置規模の東西5m×南北3mの約15㎡、調査期間は2010年4月13日～5月12日である。オイルタンク設置工事のために、事前にH鋼を打ち込んで腹おこしや切梁を設け、掘り下げとともにH鋼間に横矢板をはめ込む作業を発掘調査と併行しておこなった。

後述するように、古代の遺構と考えられる東西石組溝SD9675および南北素掘溝SD9680は、地表下約2.7m（標高88.8m）付近で検出した。しかしオイルタンク設置には地表下2.8m程度まで掘削する必要があり、SD9675は石や瓦とともに、これらの下の状況を確認しながら除去し、SD9680は必要掘削深さまで掘り下げた。オイルタンク設置深さよりも深いSD9680の大半は、工事によ

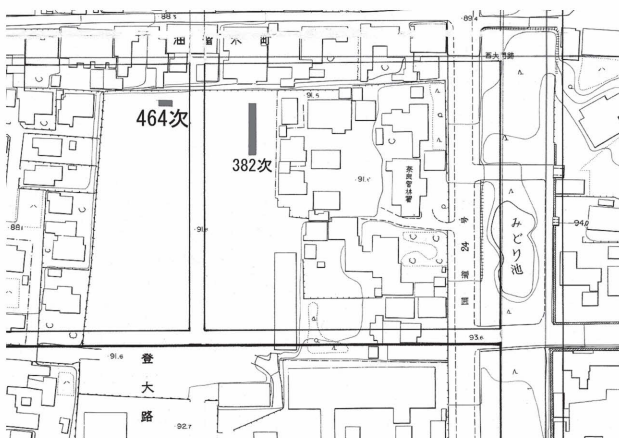


図233 第464次調査区位置図 1：3000

て破壊されないため、この部分のみ遺構養生のための砂を散布した。

### 2 層序と遺構

調査区の南半は現合同庁舎建設時に大きく破壊されている。また調査区の中央部にはそれ以前の攪乱があり、標高89.9m（地表下1.6m）まで破壊されていた。調査区の東西端の残存部標高90.3m（地表下1.2m）では、旧地表のコンクリートとその下の砂を確認した。それ以下で、標高89.9m以上の土層では、明瞭な基盤層を確認できず、中世～近世の土坑が重複しているとみられる。

標高89.9m以下、89.6mより上層は、染付を含む土器小片が入る層（これも大きな土坑とみられる）を切り込んで、調査区西壁にかかる土師器の細片を多量に含む土坑SK9678がある。また、調査区中央から東端にかけて、土坑SK9679を検出したが、その後周囲を掘り下げたため、図235・236の平面図や断面図には現れない。

調査区の東3分の1ほど、および西4分の1ほどには、地表下89.5mほどから切り込む土坑SK9676（東）、SK9677（西）がある。東の土坑SK9676は土師器を大量に含むが、遺物の出土状態に粗密があり、一体の土坑とみられるものの埋土は大きく3層に分かれる。このうち上から第2層には完形の土師器を多量に含み、上から第1層は細片のみ、第3層は少量であった。後述するように土師器の年代は13世紀代である。これらの土坑を完掘すると、調査区中央部が高まりとなって残ったが、ここでは明瞭な遺構を検出できず、また旧地表面を示すような基盤層は確認できなかった。これらの土層には礫や瓦片を含み、底面が凹凸をもちながら堆積しており、これ



図234 石組東西溝SD9675底石（南東から）

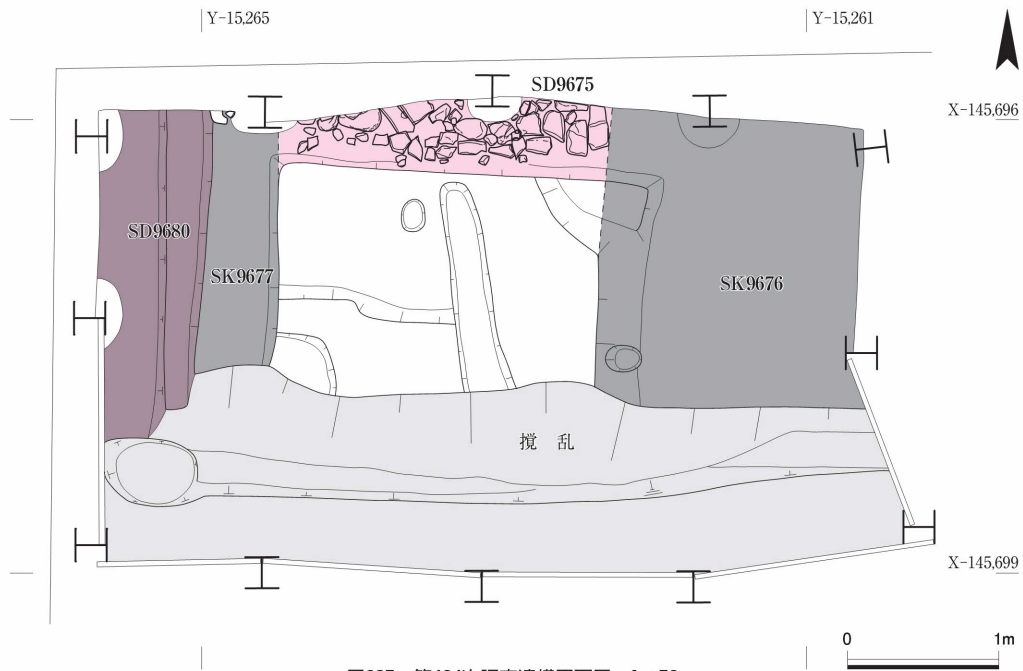


図235 第464次調査遺構平面図 1:50

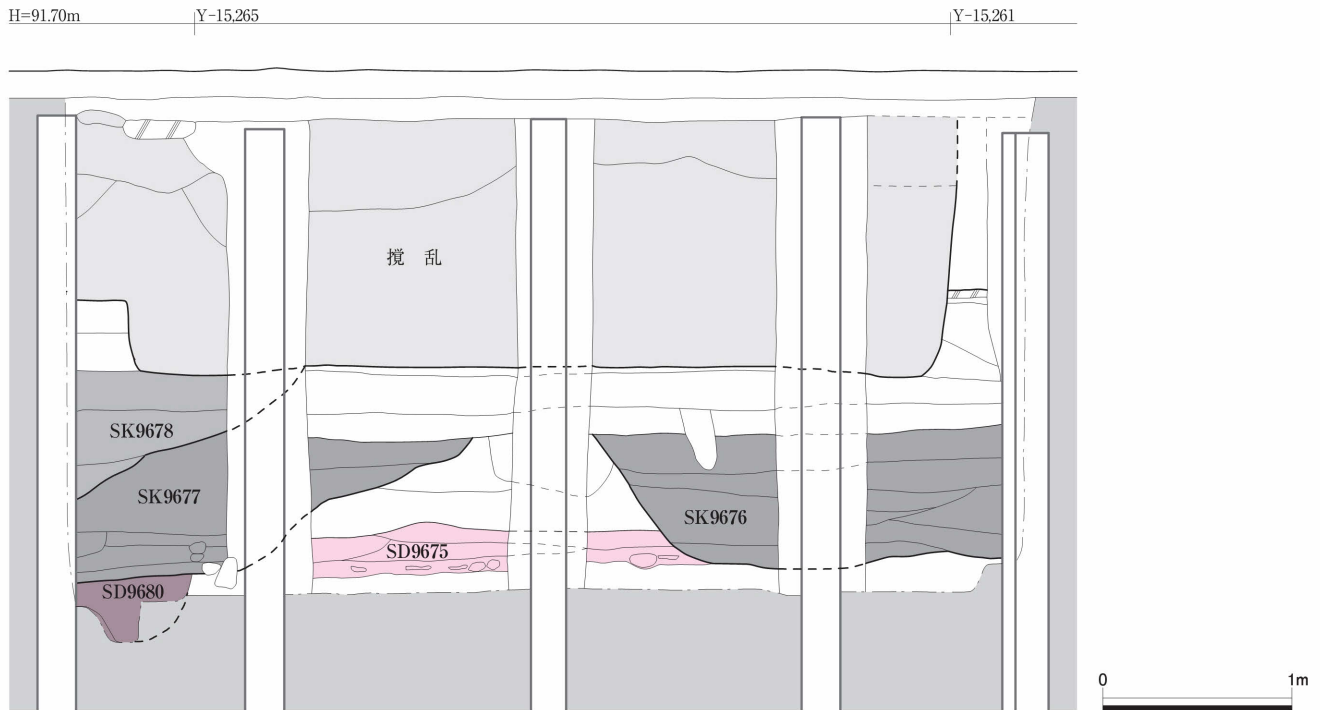


図236 調査区北壁土層断面図 1:40

も比較的大きな土坑の一部と考えられる。

標高89.0m（地表下2.5m）付近まで中央部を掘り下げると、北壁にかかる東西方向の溝SD9675を検出した。これを掘り下げたところ、石や瓦を東西に敷いた遺構を検出した。石は人頭大の河原石で、石の下面は凹凸をもつものの、上面が平滑な面となるよう据えられていた。石のない部分には平瓦が置かれている。石は比較的精良な整地土の直上に据えられており、瓦の下面には溝の埋土と同様の土があることから、ほんらいはすべて石組みであったが、部分的に瓦で改修されたものと考えられる。この遺構は東西方向の溝SD9675の底石と判断した。溝

の南辺を確認したものの北辺は調査区の北方に続くため、溝幅は明確でない。埋土はマンガンの沈着した灰褐色土で、マンガンの分布に粗密があり、また瓦片を含んでいた。石組みは調査区の中央部分のみで検出し、その長さは2.1mほどであり、東および西は先述した土坑SK9676およびSK9677で削平を受けている。

一方、西の土坑SK9677の下面では、西壁にかかる南北素掘溝SD9680を確認した。土坑下面からの深さは30cmにおよび、底面は地山（明黄色砂礫）が現れる。地山は西壁にむかってやや立ち上がるので、西壁近辺がこの溝の西肩になり、土坑SK9677は西に向かってさらに深

くなっていくらしい。先述の東西石組溝SD9675と南北溝SD9680の関係は、土坑SK9677で削平されているため不明だが、いずれも古代の遺構と考えられる。

地山（明黄色砂礫）上面は、調査区東端付近で遺構検出面に現れるものの、西方にはなく、地山上の整地土も西方を中心に堆積しており、全体的に西に下がる地形らしい。地山上の整地土は、地山に似た黄色砂礫で、その上に礫を含む黄茶色粘質土の整地がある。なお、遺構平面図（図235）に遺構番号の表記がないものは、明瞭な遺構でない。（箱崎和久）

### 3 出土遺物

土器 第464次では、整理箱14箱ぶんの土器が出土している。おもに土師器皿で、これに若干の須恵器片が加わる。瓦器はごく少量にすぎない。以下、SK9679とSK9676出土土器（図237）について述べる。

SK9679 出土した土師器皿には、口径10cm未満の小皿と、口径10cm前後の中皿、口径11cm台の大皿の3種類がある（1～5）。

SK9676 下層から出土した土師器皿には、口径8cm台の小皿と口径10cm前後の中皿、口径11cm前後の大皿の3種類がある。橙色の個体が多い。小皿（6～8）には底部外面がくぼむ個体がある。中皿（9・14）は器高2.5cm弱で、大皿よりわずかに小さい。大皿（10～13・15～20）には底部外面がわずかにくぼむ個体がある。11・19・20は口縁部に2段ナデで生じた段差を残している。

以上の土器は、土師器皿の器形から鎌倉時代（13世紀代）に属すると考えられる。（森川 実）

瓦磚類 瓦磚類は、軒丸瓦8点（6235型式1点、平安時代1点、鎌倉時代巴文1点、中世巴文3点、近世巴文2点）、軒平瓦2点（平安時代2点）、道具瓦2点、丸瓦215点（28.68kg）、平瓦784点（86.247kg）、レンガ9点（3.378kg）が出土した。（清野孝之）

### 4 まとめ

今回の調査では、調査区が狭小のため、検出遺構の性格などが必ずしも十分ではないが、以下のようなことが判明した。まず、遺構の残存状況は、合同庁舎建設時あるいはそれ以前の攪乱によって破壊されている部分が多いものの、標高90.3mのコンクリートが敷かれた直下に

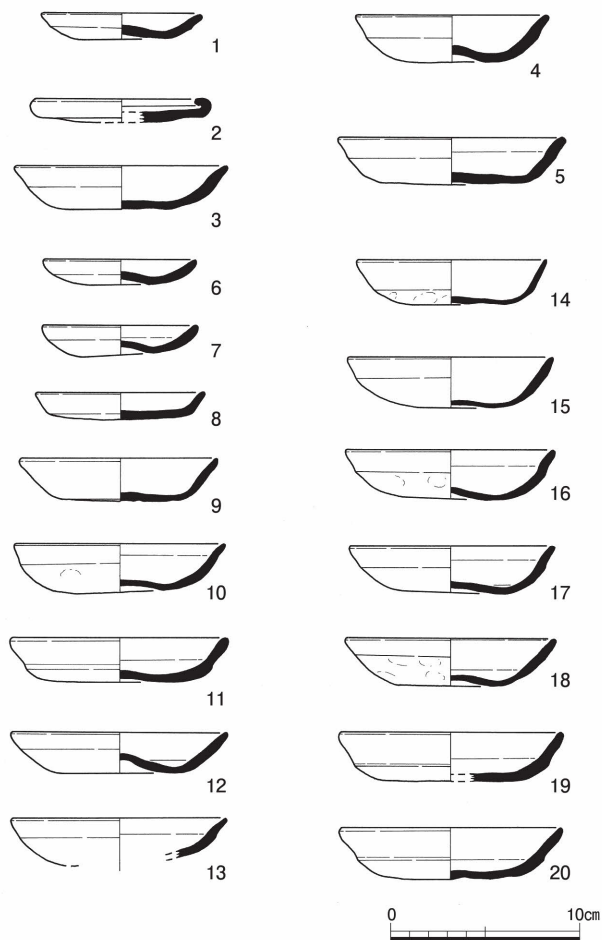


図237 第464次出土土器 1：4

は近世頃の遺構面が部分的に残存している。その下には中世・古代の遺構も遺存し、時代が降るとともに整地をくり返して、地盤が上がっているらしい。合同庁舎の敷地北方は、地盤が低く擁壁が造られているが、上記のような整地の様相からみて、近現代に大きく地盤を削平して造成されたのでなければ、近世以来の土地利用の様相を残している可能性がある。

第382次調査の所見では、冒頭で述べたように、西方の一乗院の発掘調査の様相と合致するというが、12世紀末頃の整地層上面の標高は90.0m、地山面の標高が89.5mであり、今回の調査区と比べて相対的に高い。今回の調査区では、焼土等は目だたず、13世紀以後の土坑群で大きく削平されている可能性は残るものの、やや様相を異にすると考えざるを得ない。

古代の遺構とみられる東西石組溝SD9675と南北溝SD9680は性格が明らかでない。調査地は平城京の条坊では左京三条七坊九坪の東北隅付近にあたり、少なくとも九坪内を数等分して区画する遺構ではなさそうである。これは古代の興福寺境内の土地利用を考えるうえで興味深い点と言えるかもしれないが、溝の性格も含めて今後の課題としておきたい。（箱崎和久）